

中国語倒置使役文と関連構文

李菲

sweetlich@a5.keio.jp

キーワード：倒置使役文 使役構文 結果事態 主題

要旨

中国語には、「倒置使役文」とよばれる動作対象と動作主の語順が無標の場合と逆になる構文が存在する。先行研究では、この構文を使役文として分析しているものの、どのような意味で使役と言えるのかについては詳しく論じられてこなかった。本稿は、「全身汗だく(“一身汗”）」という結果事象を含む倒置使役文を中心に考察を行なう。実例を調査したところ、主語をもたない倒置使役文が主語をもつ文よりも使用頻度が高いことがわかった。主語なしの文は、結果事態に焦点をあてると同時に、動作者が自らの行為により不本意の影響を被ったことを表す。一方、主語ありの文は実例は少ないものの、二種類の文が見られる。一つは、主題に対する属性叙述の文である。もう一つは、異常事態を伝える文である。

1. 問題提起

中国語には「倒置使役文」とよばれる構文がある。次の例が示すように、この構文は、通常は動詞(洗う)の目的語(服)として実現する動作対象が主語の位置を占め、反対に通常は動詞の主語として実現する動作主(私)が目的語の位置に現れる点で特徴的である。

(1) 这盆脏衣服 洗 了 我 一身汗。(石村 2020)

この盥の汚れた服 洗う ASP 私 全身の汗

「この盥の汚れた服を洗ったら、全身汗だくになった」

SVO の語順をもつ中国語において、「私が服を洗う」は本来“我 洗 衣服”の語順で言い表される。しかし、(1)では動作主が目的語、対象が主語の位置に置かれている。(1)のような語順をもつ文は必ず完了の形で用いられる。また、文末に数量表現がなければ文として成立しない。

(1') a? 这盆脏衣服 洗 我 一身汗

b? 这盆脏衣服 洗 了 我

(1)は「服」が「洗う」という動作の対象であると同時に「私が汗だくになった」という結果を引き起こす原因でもあるため、原因事態と結果事態の両方が含まれているので、使役構文だとされる(郭姝慧 2006)。こうした構文は、その語順と意味上の特徴から、「倒置使役文」または「反転使役文」と呼ばれている(顾阳 2001、郭姝慧 2006)。また、石村(2020)は(1)のような文の構造に注目し、「使役型数量結果構文(“致使型数量动结式”）」と名付けている。呼び名は人によって異なるものの、いわゆる倒置使役文とは、「N+V+了+人+数量表現」の構造をもつ使役構

文を指すものと考えて良いだろう¹。

しかし、(1)のような構文は、実際の発話においてはあまり見られない。BCC と CCL という 2 つのコーパスにおいては、(1)のように動作対象が主語となり、「～のせいで(～を洗ったせいで)、全身汗だくになった」を表す例は全く検出されなかった。一方、口語的な資料を含む BCC では²、次のような、文の中で主語が明示されていない例が多く見られる。

(2) 洗 了 我 一身汗。

洗う ASP 私 全身の汗

「洗濯で全身汗だくになった」

(1)と異なり、(2)では主語が明示されていない。動作対象となるモノ、すなわち「何を洗っていたか」は前の文脈で導入されており、それを補って解釈することになる。(1)のような主語を伴う文は、主語なしの(2)に比べて、コーパスでの実例が少ない。倒置使役文における主語は結果事態を引き起こす「使役主」や「原因」であるとされているが、使役主が明示されないことが多いのはなぜか。コーパスにはさらに、次のような自動詞からなる倒置使役文が存在する。

(3) 跑 了 我 一身汗。

走る ASP 私 全身の汗

「走ったら全身汗だくになった」

動詞“跑”(走る)は、動作対象をもたない自動詞である。この場合、(1)のような主語ありの倒置使役文を作ることができない。

(2)(3)から、倒置使役文において主語の有無が、当該構文を成立させる必須条件ではないことが見てとれる。先行研究では、「動作対象が主語の位置に現れ、動作主が目的語の位置に現れる」ことを倒置使役文の一大特徴としているが、このように定義してしまうと、後に見る主語なしの文や関連構文を含めた全体像を適切に捉えられないという問題が生じる。倒置使役文と呼ばれる一連の構文に対し、実例を基に、その構文と意味特徴について考察を行う必要がある。本稿は、中国版ツイッターの“微博”(Weibo)を主なコーパスとして、倒置使役文の実際の使用状況について記述したい。

2. 先行研究での指摘

まず、従来の研究でよく指摘されている倒置使役文の構造的、意味的特徴についてまとめる。

[構造上の特徴]

①倒置使役文において、主語と目的語の位置にある語は、V が表す動作の対象と動作主の関係にある。

¹ 「NP1+V+了+人+数量表現」の構造をもつ倒置使役文では、人称代名詞の「彼」や「私」が[人]の位置に来ることが多い。また、数量表現の位置には次の2種類のものも多く見られる。一つは、“一头汗(額いっぱい汗)”や“一身水(全身汗だく)”のような「身体部位が液体などでいっぱいになる」ことを表す“一+量詞+N”タイプである。もう一つは、“一下午(午後中)”や“整整三百块(まるまる三百元)”のような時間、金額の多さを示す数量表現である。倒置使役文に現れる数量表現は、通常よく用いられる“一本书(一冊の本)”や“一个小时(一時間)”のような数を示すタイプのものとは異なる。

² CCL には、主語を伴う文は見られず、主語なしの文も1例のみであった。

- ②目的語位置にある動作主は人称代名詞であることが多い。
 ③必ず数量表現を伴う。以下の例が示すように、数量表現は純粹に量を表すというより、「いっぱい〜」や「まるまる〜」といった量の多さを表している。郭妹慧(2006)では、次のような数量表現を含む文を紹介している。

(4) 那几句话 听了 我 一身鸡皮疙瘩

そのことば 聴く ASP 私 全身の鳥肌

「その話を聴いていたら、全身鳥肌が立ってきた」

(5) 这顿饭 吃了 她 整整三百块。

今回の食事 食べる ASP 彼女 まるまる三百元

「今回の食事で、彼女は三百元もの大金を使ってしまった」

(6) 那个实验 做了 他 整整一晚上。

その実験 する ASP 彼 まるまる一晩

「その実験をするのに、彼はまるまる一晩を費やした」

- (4)の“一身鸡皮疙瘩”は「全身の鳥肌」という意味の数量表現³、(5)の“三百块”はお金の数量表現である。(6)の“整整一晚上”は「まるまる一晩」という時間の長さを表す。

[意味的特徴]

- ④石村(2020:8)は先行研究をふまえた上で、倒置使役文は、「何かが生じたり、付着したり、消えたりする」意味を含んでおり、「ある動作によって人間が時間、お金などを失う、といった数量の変化が引き起こされる」ことを表すとしている。また、人間が被るそうした量の変化は予期せぬものであり、不本意な事態であることも指摘されている。

- ⑤郭妹慧(2006)では、倒置使役文における主語を使役者(causer)ととらえ⁴、当該構文は使役構文であると主張している。例えば、(1)では「服」が原因、「私」が使役対象、「全身汗だくになる」が結果事態を表す。

- ⑥倒置使役文は再帰的な意味構造をもつ点がよく指摘されている。(1)でいえば、洗濯を行う人は、動作主であるとともに、「汗だく」という悪影響を被る変化対象でもある。倒置使役文は、自分自身がある行為を行うことで、思わぬ結果を引き起こしてしまうことを表す。

3. 対応する二つの事象からみる倒置使役文の関連構文

以上は先行研究で指摘されている倒置使役文の主な特徴である。倒置使役文が表す結果事象は、数量表現が表す結果事態のタイプによって、主に二つに分類することができる。一つは、「汗」や「鳥肌」といった「異物の付着」である((1)(4))。もう一つは、「お金や時間の損失」である((5)(6))。前者は、動作主がある行為を行うことで、自らの体に思わぬ影響が生じたことを

³ “一身鸡皮疙瘩”における“一身+N”の表現は、「全身いっぴいのN」という意味である。この表現は形の面で数量表現といえるが、数詞は常に「一」で、物質が体全体に広がっている状態を指す。従来の研究ではこうした数量表現を「周遍的用法」とよんでいる。

⁴郭妹慧(2006)では「使役者(causer)」を定義していない。本稿では「使役者」を「結果事象をもたらす原因、原因事態」の意味で用いる。

表す。後者は、動作主がある行為を行うことで、時間やお金を費やしてしまったことを表す。両者はともに、人間がある動作を行うことによって不本意な、思わぬ悪影響を被ったことを表す点で共通しているが、詳しくみると、二つのタイプに異なる特徴も見られる。

(1)(4)の文末における“一身N”（全身いっぱいの～）は、他の環境でも「汗だく」や「全身の鳥肌」といった「異物の付着」の結果事態を表すことができるのに対し、(5)(6)における“整整+数量”の表現は、それ自体では量の多さを言っているにすぎず、「損失」の意味が含まれていない。よって、従来の研究では両者を同じ「数量表現」としてとらえてきたが、結果を含意する“一身N”と、量の多さだけを表す“整整+数量”とは、意味機能が異なる二種類の構文と考えるべきである。“一身N”は述語を伴わない次のような「名詞述語文」に現れることができる。

(7)a 我 一身汗。

私 全身の汗

「私は全身の汗だ」

b?我 整整三百块。

私 まるまる三百元

「私はまるまる三百元(の損失)だ」

「異物付着」の文と「損失」の文がともに倒置使役文として分析されているのは、動作対象と動作主の位置が逆転しているためと思われるが、「損失」を表す(5)(6)のような構造をもつ文は、倒置使役文に限らず、中国語ではよく見られる。

(8) 这顿饭 花 了 她 整整三百块。

この食事（費用が）かかる ASP 彼女 まるまる三百元

「この食事で彼女はまるまる三百元を使ってしまった」

(8)は二重目的語構文である。中国語の二重目的語構文は、授与の事態だけでなく、「(人)から(モノ)を取る」という「奪う」系の事態をも表すことができる。(8)は、「今回の食事は彼女にまるまる三百元を使わせた」という意味の使役文である。主語の位置にある“这顿饭”は「まるまる三百元」を「使わせた」原因なので、動詞「使う(“花”)」の「動作主」であり、(8)は倒置使役文ではない。しかし、(8)は構造的にも、意味的にも(5)と類似点が多いことがわかる。(6)も(5)と同様、動詞「する」を「費やす」に置き換えられ、(8)と同じような二重目的語構文を作ることが可能である。

(9) 那个实验 费 了 他 整整一晚上。

その実験 要する ASP 彼 まるまる一晚

「その実験で彼はまるまる一晚を費やしてしまった」

(5)と(8)、あるいは(6)と(9)はともにお金や時間の損失を表しているが、両構文の動詞の間に、「原因と結果」という関係性が成り立つ。すなわち、(5)(6)の動詞は損失を招いた原因となる行為を表すのに対し、(8)(9)の動詞はその結果としての「損失」を意味する。構文間に見られるこのような関係性は、「ドアを開ける」に対応する次の中国語の表現間の違いと似ている。

(10)a 打开 门 了。

開ける ドア ASP

「(動作を指定せずに) ドアを開けた。」

b 推开 门 了。

推して開ける ドア ASP

「ドアを押し開けた。」

c 踹开 门 了。

蹴って開ける ドア ASP

「ドアを蹴って、開けた」

語彙的使役動詞が少ないと言われている中国語は、このように原因事態となる動作と結果事態を表す語とを合わせて、使役の意味を作り出す。(10)aの“打开”は語彙的使役動詞として「開ける」を意味するが、(10)bの“推开”と(10)cの“踹开”は「開ける」ための動作と結果の「開く」を合わせることで「開ける」という使役的な意味を含意する。(5)(6)も原因事態である「食べる」「する」を動詞に据え、さらに損失したお金や時間を結果事態として加えることで、「ある行為が原因でお金や時間を損失した」ことを表す。倒置使役文とされている(5)(6)の文と、「損失」を表す二重目的語構文との間に、(10)の三つの文と同様な関係性を見てとれる。

また、「異物付着」の事態を表す倒置使役文にも類似する構文が見られる。次の、「～のせい、全身びしょ濡れになる」ことを表す二重目的語構文が(1)や(2)(3)と共通点が多い。

(11) 溅 了 我 一身水。

はねる ASP 私 全身の汗

「水が全身にかかって、びしょ濡れになった」

(12) 淋 了 我 一身雨。

浴びせる ASP 私 全身の雨

「雨が全身にかかって、びしょ濡れになった」

(1)から主語を取り除けば、(11)(12)と同種の文になることがわかる。また、(11)(12)は主語のない(2)(3)と同じ構文の形をもつ。(11)は、「あるモノが、私の体中に水をはねた」ことを表し、動作主のモノが明示されていないが、前の文脈で導入されている既知情報である。(12)は直訳すると「私の体中に雨を浴びせた」であるが、動作主が存在しないので、主語なしの形が一般的である。倒置使役文である(1)(4)、主語のない(2)(3)、(11)(12)はともに、「ある原因で、体がびしょ濡れになる」事態を表す。違いは、(1)(4)と(2)(3)は動作者の自分自身の行為が、「汗だく」の原因となっているのに対し、(11)(12)では原因が外界にある点である。一方、ともに「びしょ濡れになる」という結果事態を表す点では、三者は互いに関連している。

動作主と動作対象の文中での位置が逆転する倒置使役文は確かに特殊な現象に思われるが、構造的にも意味的にも類似する構文が存在する。そうした関連する構文との関係性や類似点は、なぜ倒置使役文が生じたのかについて考える上でのヒントとなる。本稿ではこの問題に立ち回らずに、以下では「自らの行為によって、全身汗だくになる」という事象を表す「(主語)+V+

了+我+一身汗」の構文を対象に、いわゆる倒置使役文とよばれている文の構造的、意味的特徴を明らかにしたい。

4. 主語なしの倒置使役文

4.1 「V+了+我+一身汗」構文

先行研究では、倒置使役文について分析する際、実例を用いることはほとんどなく、作例のみに頼った議論が行われていた。そのため、倒置使役文の意味特徴や成立基盤に関する記述はまだ充分とはいえない。本稿では、「(主語)+V+了+我+一身汗」の構文を対象に実例検索を行った。

倒置使役文は口語的な表現であるため、口語の用例を取り入れているコーパス(BCC)や中国版ツイッターとよばれる“Weibo(微博)”での検索数が多い。ただし、実例の圧倒的多数は、主語が文の中に明示されていないものであり、先行研究で論じられている主語ありの倒置使役文はほとんど見られない。

(13) 盖子 拧不开, 拧 了 我 一身汗。(BCC)

蓋 開けられない、ねじる ASP 私 全身の汗

「蓋を開けられず、ねじっていたら汗だくになった」

(13)は「,」が間に入っているため、下線部は複文に含まれている一節という見方もできるが、文か節かはさておき、構文内で主語が明示されていないことが重要である。(13)が表しているのは、「(蓋が開けづらくて)、ねじったら汗だくになった」ことであるので、下線部の「V+了+我+一身汗」自体がすでに原因と結果を含む使役構文となっている。次の例も(14)と同様である。

(14) 好不容易把大奔 开 回家, 开 了 我 一身冷汗。(BCC)

ようやくを ベンツ 運転して帰る 家、運転する ASP 私 全身の冷や汗

「ようやくベンツを運転して帰宅したが、運転で全身冷や汗をかいた」

(14)の下線部は、「運転したら冷や汗がいっぱい出た」ことを表し、「運転(すること)」と「冷や汗(が)出ること」は原因と結果の関係にある。こうした「V+了+我+一身汗」使役文は実際の発話の場面での使用頻度が高く、生産性が高い。本稿では、BCCとWeiboで得られた例を次の三つに分類した。

①動作対象をもつ他動詞からなる「V+了+我+一身汗」。動作対象の存在は直前の文脈に提示され、構文内では明示されない。(2)(13)(14)がこのタイプである。

②動作対象をもたない自動詞からなる「V+了+我+一身汗」。(3)以外に、次の“走了我一身汗”(歩いたら汗だくになった)も典型的である。

(15) 出来 溜达 一圈, 一点都不 冷, 走 了 我 一身汗。

外出する 散歩する 一周、少しもない 寒い、歩く ASP 私 全身の汗

「外出して一周散歩したが、少しも寒くなく、歩いたら全身汗だくになった」

③状態を表す自動詞や形容詞からなる「V+了+我+一身汗」。次の例が示すように、「ある状

態が原因で、汗だくになる」ことを表す。

(16) 吓 了 我 一身汗。

驚く ASP 私 全身の汗
「驚いて、汗だくになった」

(17) 累 了 我 一身汗。

疲れる ASP 私 全身の汗
「疲れて、汗だくになった」

(18) 疼 了 我 一身汗 (BCC)

痛む ASP 私 全身の汗
「痛さで全身汗だくになった」

他動詞であれ、自動詞であれ、こうした「V+了+我+一身N」の文が現れる文脈には共通点がある。すなわち、談話の中で、すでにある行為や状態が生じている、または生じる可能性が高いことが述べられていて、「V+了+我+一身N」の文がそれを受け、さらにその行為の結果状態や程度の激しさを伝えるものである⁵。また、①～③の「V+了+我+一身N」は、原因となったのは行為であれ状態であれ、「汗だく」という結果事態を焦点化している。話者である「私」自身の行為や状態によって、「汗だく」になったことを伝える。

(13)～(18)の意味特徴として、もう一つ注目すべき点は、結果事態の「汗だく」はすべて動作者でもある「私」が予期しない、不本意の結果状態である。例えば、(15)では「私が汗だくになったのは歩いたため」という因果関係を見てとれるが、一方、「私が汗だくになるために、一生懸命歩いた」という解釈が成り立たない。動作者の「私」が故意に結果事態を引き起こそうとする意図性が(15)の文では含意されていなく、「私」がむしろ「汗をかくはめになる」立場の存在であり、「汗だくになる」という状態変化を被る側である⁶。

「V+了+我+一身汗」において、本来動作者である“我”(私)が目的語の位置に置かれている。「私」が目的語として実現していることと、ここで論じている構文の意味特徴とは密接な関係にあると思われる。(13)～(18)において、「私」が「汗だく」という状態変化を被る対象である。そして、「対象」であることと、目的語という文中での位置は、それぞれ意味上の特徴と構造上の特徴として、互いに結びついている。倒置使役文が不本意の結果事態を表すことは先行研究ではよく指摘されているが、その原因についての分析はほとんど見られない。以上の考察から、動作者が目的語として実現することが「不本意」という意味特徴を産出するのに貢献し

⁵ 中国語では、行為の結果を伝える表現が動作主や動作対象を伴わなくても成立する。「V+了+我+一身N」の文に主語が現れないのはこの現象と類似している。

你 买 到 那本书 了 吗? - 买 到 了。
あなた 買う 手に入れる その本 ASP ma - 買う 手に入れる ASP
「その本、手に入りましたか。一手に入りました」

⁶ 不本意の事態を表す(15)に対し、「ダイエットや健康維持のために、自ら汗だくになるべく、たくさん歩く」場合は通常、以下の表現を用いる。動作者である“我”(私)が主語となる点は(15)と異なる。

我 走 了 一身汗。
私 歩く ASP 全身の汗
「私が歩いたら、汗だくになった」

ていると考えられる⁷。なお、この問題に関しては、今後さらに検討、論証を行う必要があるため、本稿では意味と構造の間に相関性が見られるという指摘に留めておく。

ここまで、実例を用いて「V+了+我+一身汗」構文の意味特徴について考察したが、同じ特徴が主語なしの「V+了+人+数量表現」全般に見られる可能性が高い。すなわち、すでに生じている出来事に対し、それがどのような結果をもたらしたかを伝える。また、その結果状態は動作者にとっては望ましくないものであり、「事態が思わぬ方向に発展した」という意味が込められているというものである。こうした特徴をもつ文は、作例として紹介されている主語ありの倒置使役文よりも、実際の発話の場面で出会いやすい。生産性もかなり高いので、独立した使役構文としての地位を確立していると考えられる。

4.2 誇張表現としての「汗だく」

「V+了+我+一身汗」の文は、結果事象に焦点をあてると同時に、人間を被害の対象としてとらえていることが以上で明らかになった。これに加え、文字通りの“一身汗”(全身の汗)の結果状態が必ずしも話し手に起きていたとは限らない点が重要である。たとえ少量の汗しかかいていなくても、あるいはそもそも汗をかいていないだとしても、予想に反してある行為が大変だ、やりづらいと感じれば、こうした倒置使役文を用いることが可能である。「V+了+我+一身汗」の文には、「大変だった」という嘆きの意味が込められている。この表現効果に貢献しているのは、“一身N”である。「全身の～」を表すこの表現は結果事態を誇張して言い表すことで、話し手の「大変だった」という気持ちを際立たせる。

筆者は今この論文を書いている、汗こそ出ていないものの、文法と意味を記述することの難しさに唸りをあげている状態である。この「大変だ」という気持ちを、次のように表現したからといって嘘をついたことにはならないだろう。

(19) 写 了 我 一身汗
書く ASP 私 全身の汗

「(論文を) 書くのに、全身汗だくになった」

倒置使役文のように、結果事態を誇張するという使役構文は英語にも見られる。西村(1998:191)では、英語の talk someone's ear off、eat someone out of house and home の結果構文を取り上げ、「誇張表現(hyperbole)」であると指摘し、「動詞の表す行為の程度や様態がいかに極端であるか(「うんざりするほどしゃべりまくる」、「大変な大食いである」)を強調する」ための使役構文であるとしている。こうした特徴は、「V+了+我+一身汗」にも見られる。前節では、動詞の自

⁷ 「V+了+我+一身汗」という語順は、次のような、「～に(液体など)を吹きかける」の事態を表す二重目的語構文の語順と同じである。

他 噴 了 我 一脸 驱虫剂
彼 吹きかける ASP 私 顔中 殺虫剂
「彼は私に殺虫剤を顔中吹きかけた」

この文において、「私」は殺虫剤を吹きかけられる被害の対象である。「V+了+我+一身汗」はこうした構文の構造を模倣することで、動作者でもある「私」を同時に被害の対象として見立て、「不本意の影響」であることを伝えている可能性がある。主語なし倒置使役文が表す意味とその構文特徴の関係については、なお考察する必要がある。

他によって当該構文を三タイプに分類したが、どのタイプも、「行為や様態が非常に大変なものであった」ことを意味の一部としている。

(20) 拧 了 我 一身汗。

ねじる ASP 私 全身の汗

「ねじったら、全身汗だくになった」

(21) 走 了 我 一身汗。

歩く ASP 私 全身の汗

「歩いたら、全身汗だくになった」

(22) 热 了 我 一身汗。

暑い ASP 私 全身の汗

「暑くて、全身汗だくになった」

(20)は、「ねじるという動作がいかにも大変だったか」ということを、「汗だくによって」という結果状態によって表現している。(21)は、「汗だくになるほど歩いた」と解釈できる。(22)は、「汗だくになるほどの熱さ」を表す。これらは使役文ではあるが、行為や様態の程度を表す文としても解釈しうることがわかる。特に、(22)における“热”は形容詞であるため、程度の文としての解釈が強くなる。

5. 主語ありの倒置使役文

5.1. 「主題＋属性叙述」の文

「V＋了＋我＋一身汗」の構文的、意味的特徴が以上で明らかになった。次は主語を伴う(1)のような文を取り上げ、両者の関係性について考えたい。主語ありの倒置使役文は、BCCではほとんど見られないが、Weiboには少数ではあるが存在する。本稿は考察対象を「V＋了＋我＋一身汗」に絞り、Weiboにおいて、この構文が主語を伴う実例を探した。動詞“洗”からなる(1)のような構造をもつ例は検出されなかったのに対し、動詞“吃”(食べる)からなる“主語＋吃了我一身汗”は比較的多く、全76例中7例見られた。そうした文では、次の(23)のように主語の位置に、食べ物や料理名を意味する語が来ることが多い。

(23) 韩国烤肉 吃 了 我 一身汗。

韓国焼肉 食べる ASP 私 全身の汗

「韓国焼肉を食べたら、全身汗だくになった」

先行研究の定義では、(23)は倒置使役文となる。倒置使役文における主語は、使役主や原因とされているが、(23)がもつ意味機能、及び主語がどのような意味での使役主なのかは明らかにされていない。(23)を単に「韓国焼肉を食べたため、全身汗だくになった」と解釈しただけでは、「汗だく」の原因は「韓国焼肉を食べる」という事態全体になるので、なぜ主語の「韓国焼肉」が使役主や原因とされているのかははっきりしない。事態全体ではなく、「韓国焼肉」という料理だけを原因として取り立てて主語に据えているのなら、そこに何らかの意味上の動機が存在するはずである。つまり、なぜ「韓国料理を食べる」ことではなく、「韓国料理」を原因として

主語にしたかを意味の面で説明することが必要である。このことについて考える手がかりとして、(23)の主語と述部の意味的なつながりに注目すべきである。

(23)において主語の「韓国料理」は、述部の“吃了我一身汗”の結果事態を引き起こす原因ではあるが、この文は「韓国焼肉のせいで、私が全身汗だくになった」という意味ではない。前後文脈を考えると、このような解釈は成立しない。(23)は、Weiboの発信者が韓国料理店を訪れたときの料理紹介である。「今韓国料理屋に来ていて、焼肉を食べたら全身汗だくになった」という文脈の中での文であり、「汗だくになったのは韓国焼肉のせいだ」という責任追及の文ではない。(23)の文はいわば、韓国焼肉がいかに辛かったか、あるいは熱かったかを少し誇張して表現したものである。したがって、(23)における「韓国焼肉」は結果事態との間に「原因と結果」の関係性が成り立つものの、責任追及されるような使役主や原因ではなく、属性の解説を受けると近い。主語と述部の間に「主題+解説」の関係が成り立つ。

主語と述部の関係性がわかれば、なぜ(23)では「韓国焼肉」を原因として取り立て、主語に据えているのかが見えてくる。(23)は、「なぜ私が汗だくになったのか」、「何が私を汗だくにしたのか」という責任追及や原因探しの文ではない。それよりも、「汗だくになった」ということに焦点をあてつつ、同時に「韓国焼肉」の辛さ、熱さを表現するための文である。このような表現機能をもつ文において、主語と述部の関係性を単に「原因と結果」としてとらえるより、「主題+属性の解説」ととらえたほうが文全体の意味機能を適切に把握できる。

この「主題+解説」のとらえ方は、“吃了我一身汗”が単独で使われることが多いこと(全76例中69例)、そして次のような「主題」と“吃了我一身汗”との間に「,」が入る例が存在すること(全76例中2例)を考えると妥当といえる。次の(24)では、「,」が入ることにより、「韓国料理」の主題、トピックとしての位置づけがより明確になる。

(24) 韩国料理, 吃了我一身汗。

韓国料理、食べる ASP 私 全身の汗

「韓国料理、食べたら全身汗だくになった」

(23)のような「,」なしの文が7例、「,」ありの文が2例あるため、約三分の一の割合で「,」が入るということである。(23)と(24)との意味的な違いは極めて捉えがたいものである。「,」が入る理由としては、“吃了我一身汗”は主語がない文として定着しているため、中国語話者にとって「主語を入れてはいけない」という意識が働いている可能性を指摘するに留めたい。“吃了我一身汗”は単独では「食べることの大変さ」を表現する文であるが、(24)では「韓国料理」というトピックに対する解説として用いられている。よって、(23)(24)はともに、「～料理に関して言えば、食べたら汗だくなるほど辛かった、あるいは熱かった」と解釈すべきである。

従来、倒置使役文は「動作対象となるモノが主語として実現し、反対に動作主が目的語として実現する」というように定義されてきたが、倒置使役文は必ずしも、通常の「主語+動詞+目的語」の他動詞文ではない点に注意すべきである。“V了我一身汗”が単独の文として用いられることが多い点、主語の後ろにカンマが入る点は、主語あり倒置使役文が「主題+命題」の文である可能性を示している。この「主題+解説」の観点から、もう一度主語ありの(1)の意味

について考えてみたい。

(1) 这盆脏衣服 洗 了 我 一身汗。

この盥の汚れた服 洗う ASP 私 全身の汗

「この盥の汚れた服を洗ったら、全身汗だくになった」

従来、(1)の主語は使役主、原因とされているものの、文全体の意味機能と成立を可能にする状況が不明であった。(1)の主語を主題としてとらえると、「この盥の汚れた服は、全身汗だくになるほど洗いにくかった」と解釈でき、文全体が洗濯物の洗いにくさを表現していることがわかる。したがって、動作対象が主語となる倒置使役文は、動作対象の属性に焦点をあてる一種の属性描写の文ということがわかる。こうした倒置使役文を成立させるためには、動作対象と結果事態との間に「原因と結果」の関係性は当然なければいけないが、その上で、動作対象の性質、属性を描くという意味上の動機づけが必要である。以上からわかるように、「原因と結果からなる使役文」というだけでは、倒置使役文の意味機能を十分にとらえているとはいえず、倒置使役文にはこれをベースにした特定の意味機能が見られることがわかる。次節では、他のタイプ的主語あり倒置使役文を取り上げ、その意味機能について検討する。

5.2. 異常事態を伝える文

主語あり倒置使役文の実例の中に、「異常事態の発生」を伝えるタイプの実例が見られる。そうした例では、主語と述部との間に「主題+解説」の関係性が見られない。例えば、次の例は「カップ麺でさえも、食べたら汗だくになるほどの暑さ」を表しており、「カップ麺」の辛さを表現しているのではない。

(25) 怎么会 这么 热, 泡面 吃 了 我 一身汗

なぜ だろう こんなに 暑い、カップ麺 食べる ASP 私 全身の汗

「なぜこんなに暑いだろう、カップ麺を食べただけで全身汗だくになった」

(25)の文脈から、下線部を「カップ麺は全身汗だくになるほど辛かった、あるいは熱かった」という意味で解釈できないことがわかる。下線部は主題「カップ麺」に対する属性叙述の文ではない。一方、前の文脈で「会社の空調が壊れていて、暑い」ことが述べられているため、下線部の文は「暑さ」に対する「説明」や「解説」のような役割をはたして、「カップ麺を食べただけで、汗だくになるほどの熱さ」と解釈できる。いわば、下線部全体が前の文脈で導入している「暑さ」に対して、解説、属性叙述の役割をはたしている。

主題と述部の関係から見れば(25)と(23)は異なるものの、「属性叙述」という意味機能に注目すると類似点に気づく。(23)の場合、構文の中に「主題+属性叙述」の関係が見られるのに対し、(25)では構文全体が、前の文脈で導入している異常事態に対する解説の役割をしている。(25)と(23)は、構文内における主題と述部の関係性が異なっているが、ある事物の性質、属性について説明を加えるという点で共通している。次の(26)も(25)と同様、異常事態が発生したことを表現するための文である。

(26) 这点路 走 了 我 一身汗。

このくらいの道 歩く ASP 私 全身の汗

「このくらいの道を歩いただけで、全身汗だくになった」

(26)は、「職場から家までのたったの 100 メートルの道のりを歩いて帰ろうとしたら、途中で何回も客引きするタクシーの運転手に呼び止められ、タクシーに載せられそうになったので、くたくたになった」ことを Weibo に投稿したものである。主語の名詞句の中に、「少し」を意味する語(“点”)が入ることで、「～だけで」や「～くらいで」の意味が明確になり、文全体から「汗だくになるはずもないのに、汗だくになった」という意味が読み取れる。それを通して事態がいかに異常なものかを伝える。(26)全体で異常事態についての解説を行っているのである。

異常事態について説明する倒置使役文は、動詞「歩く」(“走”)からなる文に多く見られる。Weibo では“走了我一身汗”を含む文が 114 例見られたが、その内、主語ありの文は 10 例である。この 10 例の内、9 例は(26)のように、「短い距離の道」を意味する名詞句が主語となり、「わずかな距離を歩いただけで、全身汗だくになった」ことを表すものである。それによって伝えようとした「異常事態」は必ずしも「異常」とまではいえないにしても、どれも「歩きづらい状況」である。例えば、「真夜中の一人歩き」、「大手術後の初めての外出」、「犬に後をつけられているときの一人歩き」などである。これらの事態がいかに大変なものだったかは、(26)のような文から見てとることができる。

異常事態を伝える倒置使役文と、「主題と属性叙述」の文は、事物の属性について解説するという点では共通している一方で、主題と述部の関係性において違いが見られる。「主題と属性叙述」のタイプの文では、主題の指示対象は結果事態を引き起こす原因に十分になりうるものである。(24)で言えば、韓国料理は辛い料理としてよく知られており、「韓国料理」といえば、「辛さで汗だくになる」ことも予想しうる。属性叙述という意味機能もこの論理関係を土台としている。一方、異常事態の文では、主題の指示対象は通常、結果事態を引き起こしえないものである。少し歩いたくらいで、あるいはカップ麺を食べたくらいでは、汗だくになることが通常は想定しにくい。主題と結果との間に一種の逆説的な関係が成り立つ。この二種類の用法(論理関係)をつなぐものは何か。

この問題を考える上では、やはり解説の部分である「V+了+我+一身 N」に注目すべきである。本稿では、いわゆる倒置使役文の成り立ちを通常他動詞文と区別し、「主題+解説」の文とした。こうした文は、「V+了+我+一身 N」構文に主題を継ぎ足す形で作られる。両用法の関連性は、主題の選び方、継ぎ足し方にあるといえる。すなわち、主題が結果事態を引き起こしそうなものならば、主題の指示対象に対する「属性叙述」の意味に傾き、一方主題が結果事態を引き起こしそうなものならば、異常事態についての「解説」となる。

Weibo で検出された、動詞“走”からなる主語あり倒置使役文のうち、1 例のみ「主題+属性叙述」タイプのものがある。主題の名詞句は、結果事態を十分に引き起こしうるものである。

(27) 这雪地 走 了 我 一身汗
この雪道 歩く ASP 私 全身の汗

「この雪道を歩いたら、全身汗だくになった」

「雪道」が歩きにくいことは十分予想しうるので、(27)は「雪道は全身汗だくになるほど歩きに

くい」と解釈でき、「主題+属性叙述」タイプの文となる。倒置使役文における使役主と結果事態の関係性は、たとえ同じ動詞であっても、使役主の指示対象によって異なりうるが見て取れる。

5.3. コピー文

最後に、「V+了+我+一身N」が作るコピー文に少し触れておきたい。コピー文とは、次のような同じ動詞を繰り返す「V+O+V+了+我+一身N」の文のことである⁸。このタイプの文は、動詞“洗”からなる“洗了我一身汗”の文に多く見られる。

(28) 洗 葡萄 洗 了 我 一身汗。

洗う ぶどう 洗う ASP 私 全身の汗

「ぶどう洗いで、全身汗だくになった」

(28)は、倒置使役文の関連構文である。下線部のVNからVを取りのぞくと、従来倒置使役文とされてきた構文となる。

(28') 葡萄 洗 了 我 一身汗。

ぶどう 洗う ASP 私 全身の汗

「ぶどうを洗ったら、全身汗だくになった」

Weiboの実例では、“洗了我一身汗”は独立した文を作るか、コピー文の後半部分となることが多い。一方、「洗う」の動作対象が主語となる(28')のような例は全く検出されなかった。つまり、「全身汗だくになった」ことの原因として、「ぶどうを洗う」という行為の方が「ぶどう」という動作対象よりも想定されやすいということである。すなわち、「何かを洗って、その大変さから全身汗だくになった」とき、私たちは「洗う対象」そのものより、まず「洗う」という行為を原因としてとらえやすい。(28')よりも(28)の実例が多いのは、こうしたとらえ方と関係していると考えられる。洗うことの大変さを対象の「ぶどう」に求めるならば、「大量のぶどう」や「非常に洗にくいぶどう」といった目立った特質、属性が「ぶどう」になければならないと思われる。しかし、その場合でも、(28')からは「主題+属性叙述」という関係を見出すことができ、「全身汗だくになるほど洗にくいぶどう」という解釈が成り立つ。

6. まとめ

本稿では従来、倒置使役文とよばれている、動作対象と動作者の語順が無標の場合と逆になる構文を取り上げ、コーパスやSNSでの実例を観察することで、関連する構文との繋がりを踏まえた上で、その意味特徴、成立基盤について考察を行った。その結果、倒置使役文及びその関連構文に関して、さまざまな興味深い事実が明らかになった。まず、実際の発話の場面では、

⁸ 次のような例がコピー文の典型的用法である。

他 看书 看 傻 了。

彼 読む 本 読む 呆ける ASP

「彼は本ばかり読んで、頭悪くなった」

「本を読む」ことは通常「頭の働きを良くさせる」と想定されやすいが、「本を読んで、かえって頭の働きを鈍くした」という意外な結果を表すのが、コピー文の主な意味機能である。

主語をもたない倒置使役文は、主語をもつ文よりも多いことがわかった。主語なしの「V+了+人+一身N」は動詞の自他によって大きく三種類に分けられるが、ともに結果事態に焦点をあて、動作者が自らの行為により不本意の影響を被ったことを表す。また、結果事態を誇張して言うことで、動詞が表す動作や状態の大変さを表現している。

一方、主語ありの倒置使役文は実例が少ないが、二タイプのもが見られる。一つは、主題に対する属性叙述の構文である。もう一つは、通常では起こりえない異常事態について伝える構文である。こうした主語ありの文は、従来使役文としてとらえられてきたが、その成り立ちは他動詞文と異なる。主語と目的語の位置にあるモノを、単純に動作対象と動作者の関係でとらえてしまうと、構文全体の意味特徴を把握することが難しくなる。本稿はそうした文を「主題+解説」の文として分析した。倒置使役文における主語は主題、トピックに近い。結果事態を引き起こしうるモノが主題となる場合、主題に対する属性叙述の文となる。反対に、結果事態を引き起こすモノとして想定しにくい主題の場合、異常事態を表す文となる。

従来の研究では、倒置使役文がどのような意味で使役的なのかについての記述が少ないように思われる。本稿で得られた考察結果は、こうした問題に対しある程度答えることができる。今回の考察は、「V+了+我+一身汗」構文のみを対象としたが、今後は他のタイプの「V+了+人+数量表現」構文についても観察を行い、引き続き倒置使役文の意味機能について考えていきたい。

参考文献

- 顾阳(2001)「隐性使役动词及其句法结构」『生成语法理论与汉语语法研究』: 112-34. 哈尔滨: 黑龙江教育出版社
- 郭姝慧(2006)「倒置致使句的类型及其制约条件」『世界汉语教学』(2):40-50
- 石村广(2020)「致事型数量动结式的产生机制—一致动用法的发展和变异」『当代语言学』(22):1-16
- 施春宏(2007)「动结式致事的类型、语义性质及其句法表现」『世界汉语教学』(2):21-39
- 斎藤純男・田口善久・西村義樹編(2015)『明解言語学辞典』東京: 三省堂.
- 西村義樹(1998)「行為者と使役構文」中右実・西村義樹『構文と事象構造』東京: 研究社.
- BCC 北京语言大学语料库
- CCL 北京大学语料库

Inverted Causative and Related Construction in Chinese

Li Fei

sweetlich@a5.keio.jp

Keywords: inverted causative, construction, resultative event, topic

Abstract

Chinese has what is known as the inverted causative construction, in which the order of the agent and the patient argument is reversed from that of unmarked constructions. What makes it a causative construction, however, has not been fully investigated. This article is primarily concerned with a subtype of this construction, in which “一身汗” (covered in sweat) represents the caused event. I have found that the vast majority of real-life examples of this subtype, which do not have overt subjects, serve to focus on the caused event and to portray the agent as being adversely affected by his or her own action. Naturally occurring instances that do have overt subjects, though much smaller in number, are either predicational sentences that attribute properties to the subject or sentences that describe extraordinary events.

(リ・フェイ 立教大学)